

浄

monthly JODO

土

2015
October

10



干柿

陶芸家
南
初枝
の作品

干し柿にする柿はそのままでは食べられない。つまり渋柿である。渋柿を乾燥させると渋味がすっかり消えて、逆に甘味が出る。可溶性のタンニンが不溶性に変わる、これを渋抜きという。大昔からある一種のドライフルーツである。あたりまえのことだが甘柿は渋抜きをしなくても食べられる。じゅうぶん甘いからである。ところが、糖度そのものは砂糖の1.5倍ともいわれる渋柿のほうがはるかに高いため、甘柿を干しても渋柿ほどには甘くならない。なかなか不思議なことである。

干し柿。地方によっては、ころ柿と呼ぶ。枯露柿、転柿の文字を当てる。白柿と呼ぶところもあるが、それは糖分を結晶した白い粉が表面に出てくるからである。

作者は、その干し柿に顔を付けた。表情豊かな干し柿たちは、かつて渋柿であった過去を照れているようだ。

撮影・芝崎慶三

浄土

2015/10月号 目 次

連載	法然上人のお言葉⑬	梶村 昇	英訳 河西良治	2
	現代に生きる法然上人①	梶村 昇 + 阿満利麿		4
連載	会いたい人 藤間勘十郎さん①	関 容子		16
連載	響流十方	袖山榮輝		24
連載	東日本大震災の被災地を訪れて⑥	成田淳教		28
連載	友好の絆 2 ③	森 清鑑		32
連載小説	渡辺海旭②	前田和男		38
連載	誌上句会	選者＝増田河郎子		44
連載	マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう		47
	編集後記			48

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉

裏表紙裏＝仏教歳時記



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

ご法語

先師法然上人あさゆうおしえられし事なり。念仏申すにはまたく様もなし。ただ申せば極楽へうまるとしりて、心をいたして申せばまいる事なり。ものをしらぬうえに、道心もなく、いたずらに所えなき物のいう事なり。さいはん口にて、阿弥陀仏を一念十念にても申せかしと候いし事なり。

(信空上人伝説の詞)

現代語訳—わが師法然上人が、朝に夕に教えられたことである。念仏を申すには、まったく理屈などない。ただ申せば極楽へ生まれると知って、心をこめて申せば往生することである。(それを)物の道理も知らない上に、仏道を修める志もなく、何の論拠を持たない者が、いたずらにとやかくと言っているのである。それを言う口があるなら、南無阿弥陀仏を一遍でも十遍でも申しなさい、

Honen Shonin's Sayings

My late master Honen Shonin taught me every morning and evening as follows:

You have only to utter the nembutsu and you do not need any reasons for it. Knowing that only the utterance of the nembutsu guarantees the birth in the Paradise, just say it wholeheartedly and you will be born there. Nevertheless, those unreasonable people who do not have any clear aims to pursue the way of Buddha nor have any grounds of their arguments are saying this and that unnecessarily. Rather than say such useless things, they should say Nam Amida Butsu even once or ten times.

(Shinku Shonin Densetsu no Kotoba)

ということであった。

解説

法然上人に身近で言われているような気の話です。「阿弥陀さまが、お念仏を申せと言われているのであるから申せばよい。それを意義はどうの、形式はどうのなどと言うのは、まったく必要のないことだ」というのです。街の書店に行きますと、お念仏に関係する本が何冊も並んでおります。著者はみんな物の道理も分り、仏道を修める志もある方々なのでしょうが、上人に言わせると「理屈が多い」ということになりそうです。

「さいはん口にて」というのは「さ、言はん口にて」ということで「そのようにとやか言う口があるなら」ということでしょう。「それなら南無阿弥陀仏を一遍でも十遍でも申しなさい」というのですが、本当に上人に傍で言われているような気がいたします。真実の信仰とは、こういうものなのでしょうが、なかなかそう成り切れません。そこで理屈を言うのでしょうか、自分を含め、つくづく頑強な凡夫と思わずにはおられません。人間というものは、救われ難いものです。

Commentary

This story makes me feel as if Honen Shonin were teaching close by. He said that we should say the nembutsu because Buddha told us to do so and that it was not at all necessary to argue about its meanings or forms this way and that. When you go to a bookstore in a town, you will find a number of books about the nembutsu ranged on the shelves. Their authors will be reasonable enough to know what's what and have aims to pursue the way of Buddha, but Honen would probably say that there are "many reasons" in them.

The phrase "saiwankuchinite" in the original text quoted above will be analyzed as "sa-iwan-kuchi-nite" (glossed as "so-say-mouth-by" in English), which is translated into the modern Japanese "sono yoni toya kaku iu kuchi ga aru nara". In English it literally means "if you have a mouth by which you say this and that in such a way". Honen said, "If so, you should say Nam Amida Butsu even once or ten times instead". This sounds like he really tells us so right beside us. If we had true religious beliefs, we could utter it just as Honen instructed us, but we cannot follow his teaching so faithfully. That might be why we are arguing this and that about the nembutsu. We really cannot help feeling from the bottoms of our hearts that humans, including myself, are true mediocrities. That is, humans are difficult to save.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

英訳……

河西良治

中央大学文学部教授

法然上人鑽仰会講演会 平成二十七年六月十九日 於大本山増上寺

梶村昇

先生

対談

阿満利磨

先生

法然上人

現代に
生きる

阿満 法然上人の教えは、ただ念仏せよ、という極めて簡単なことでございます。ただ念仏せよ。ひたすら念仏せよ。そのほか、何もおっしゃらなかったのです。しかしその「ただ念仏せよ」ということが自分の身に付いて、生きる上での力になるということは簡単ではありません。

「ただ念仏せよ」「ただ念仏せよ」、なぜただ念仏すればいいのかという根本がわからないと、お念仏は上っ面になってしまうというか、お念仏をしても力にならないのです。

そういうことを法然上人は初めからおわかりになっていて、念仏の意味がわかるためには、まず我が身の程を知りなさい。自分がどういう人間であるかということを知れば、自分のあり方に納得すれば、お念仏は自然にわかってくるようになると思っておられます。

ですから、問題は、その我が身の程を知ることです。ところが我々、特に現代人は、我が身のことを追求するのは一番苦手な仕事です。法然上人が私どもに我が身の程を知れとおっしゃってくださった中身が、一体どういうことなのか。それをしばらく梶村先生にお伺いしながら、私たちの考えを深めていきたいと思っておりますが、先生、いかがでございますでしょうか。

梶村 阿満先生との対談の機会を得まして非常にありがたいと思っております。

最初から私事を申し上げて誠に恐縮でございますが、私は大正十四年（一九二五）生まれで、今年九十歳です。残りももうわずかでございますので、今ごろ、救いとは何かと言っている間に合いません。今日はお耳の痛い方もいらっしゃるかもしれませんが、率直

に申し上げてみたいと思っております。

宗教というのは、結局、私事に始まって、私事に終わるのではないかと思います。岸本英夫先生が『宗教学』という教科書を書かれました。

その中で宗教の領域を四つに分けていらっしゃいます。大きく分けて、一つは主観的立場、一つは客観的立場です。主観的な立場とは何かと言うと、今日私が申し上げる信仰についてのこと。例えば法然上人はどういう人だったのか、親鸞聖人はどういう人で、私はこういうことを信じているというようなことで、これは主観が混じります。また宗教とはどうあるべきかという、難しく言えば宗教哲学的な考え方、これも主観です。この二つのことが主観的立場です。

もう一つは客観です。それはお釈迦様がいつ生まれたとか、イエス・キリストはいつ生

梶村昇（かじむらのぼる）

亜細亜大学名誉教授

主な著書

『法然上人とお弟子たち 乱世を生きる同信の世界』
(浄土宗 浄土選書 1998)

『法然の言葉だった「善人なをもて往生をとくいはんや悪人をや」』(大東出版社 1999)

『法然上人をめぐる関東武者 3 津戸三郎為守』
(東方出版 2000)

『聖光と良忠 浄土宗三代の物語』
(浄土宗 浄土選書 2008)

『法然上人伝』
(大東出版社 2013)



まれたとか、仏教の歴史はどうだとかということとは、主観を混じえようとしても混じえられません。また、仏教とかキリスト教、イスラム教を比較研究しているという宗教学があります。この二つは客観的です。

例えば、この増上寺は浄土宗です。浄土宗では浄土があると説きます。浄土があるというのはどういうことでしょうか。浄土は西の方十万億土の彼方にある。実在していると説きます。あるいは皆さん方の中にはイメージとしてあるとか、色々な浄土の言い方があると思います。

しかし、浄土が西の方、十万億土にあるということは、信じられますか。私は今、そう思っていないのです。イメージとしてもちよつと考えられない。自分が信じていないことを、法然上人がおっしゃられたからと言って、人々に説くのはおかしいのではないかと思います。

そうしますと、どうなるか。日本人は死んだら、土に帰るとよく言います。私は土に帰ると思います。法然上人が帰依された中国の善導大師という方には、「仏に従い、従容として自然に帰す。自然は即ち是弥陀の国なり」という有名な言葉があります。

仏の教えに従って生き、最後は自然に帰る。そもそも善導さんは五世紀から六世紀の方、聖徳太子より少し古い方です。その方が自然と言っても、今私たちの考えている天地万物の自然ではなくて、計らいをこえたものを自然と想っていたと思います。

その善導さんの言葉によれば、人の計らいを越えたもの、それが即ち弥陀の国なり。阿弥陀様の国とおっしゃっている。

私は先日、お墓をつくりました。墓碑をつくり、それに石屋さんが何も書かないのはお

かしいというので、「自然に帰る」と書きました。私は、最後は土に帰ると思った。今もそう思っていますが、その自然こそ阿弥陀様の国だと思っています。

私は法然上人が大好きです。法然上人のお言葉によって今日まで生きてきたような気さえいたします。『方丈記』は法然さんと全く同時代です。あれを読みますと、あの頃は明日をも知れない日々です。法然上人も多分そう思っていちゃった。ですから浄土ということを言われたのだと思います。

しかし今私たちは、明日をも知れない日々とは思わないでしょう。明日も生きています。思っています。だから時代に対する感覚、時代から受ける感覚は、だいぶ違うと思います。宗教は必ず時代の影響を受けます。あの頃の時代の影響と今日の時代の影響と同じように思っているのでしょうか。おそらく法然上人は笑われると思います。

皆さんよくご存じの安岡正篤さんが、昭和五十年二月に喜寿のお祝いをやっている。その二週間後に奥さんが亡くなられている。それから昭和五十八年に八十六歳で安岡先生も亡くなります。

奥さんが亡くなったときにこういう詩を詠んでおられます。

「朝起きて、厨房に声あらず」。台所に行っても誰もいない、声がしない。

「夜帰りに寂寞としてまた迎えるなし」。夜帰ってくると、誰もいないんです。寂寞として迎える人もいないと。

「梅花すでに散り 柳条乱る」。柳が乱れている。

「孤り座し、短檠対し書を見る」。一人でスタンドの下で本を読んでいるのでしょう。何とも寂しい詩です。これを読んで、ああ、安岡正篤ともある人が、やはり人生の寂しさに

阿満利麿 (あまとしまろ)

明治学院大学名誉教授

主な著書

『法然の衝撃 日本仏教のラディカル』

(人文書院 1989)

『仏教と日本人』

(ちくま新書 2007.5)

『選択本願念仏集—法然の教え』

(角川ソフィア文庫 2007.5)

『日本人はなぜ無宗教なのか』

(ちくま新書 1996)

『人はなぜ宗教を必要とするのか』

(ちくま新書 1999)

『法然を読む 「選択本願念仏集」講義』

(角川学芸出版 1999)

『行動する仏教—法然・親鸞の教えを受けつぐ』

(ちくま学芸文庫 2011.8)

『法然入門』

(ちくま新書 2011.8)



耐えられなかったのかなということを考えました。

瀬戸内寂聴さんは九十三歳だそうです。この前、『文藝春秋』を読んでいたたら、「私は切に生きるということを伝えたい。生かされている私たちは何をすべきか。私はドーベルのこの言葉が好きです。『世の中ははかない、虚しいものです。どうせ生きるなら、一瞬一瞬を切実に生きていく』。私も一生懸命に生きる」と言っています。

またこういうことも言っています。「私はあの世を信じています。だから死は怖くない。やつと来たかとあの世の人は迎えてくれると思う。一体誰に最初に会うのだろうかとも考えます」

これは『文藝春秋』の二〇一二年、私は入院しておりましたが、そのときに読みました。寂聴さん、そのときも九十歳ぐらいだったでしょう。元総理大臣の中曽根康弘さんが

書いた本を、このあいだ読みました。

「東大で学んでいるときに、私の母が亡くなった。母が亡くなるときに息子は東大で試験の真最中だから、知らせるなど言って亡くなった。私は母が病氣ということを知りて飛んで帰った。しかしすでに母はいなかった。だから、今、私は天上の星を見ると、あの星の中の一つが母だと思っている。絶対にそう信じている」と書いています。

今、三人の方のご紹介をしました。いずれも批判ができることではない。私はそれでいいと思っています。宗教は皆、千差万別。同じに統一しようとしても無理です。ただ人間を超えた大きな力がある。それだけは間違いないことです。

それを何でも人間ができると思っている。そういう政党もあるようですが、それは間違いです。人間を超えた大きな力があります。

その証拠にお互い、明日のことはわかりません。五年先にどうなっているか、お互いわかりません。今日の今ある姿を、予定どおりと思える人はいますか。誰もいないと思います。思わざることがあって、お互い、こうなっているのです。

そう思うと、人間を超えた大きな力の存在。それだけは間違いないと思います。科学的に言っても。

今三人の例を出しましたが、そのほか誰であろうとかまいません。法然上人もそのとおりだとおっしゃられると思うのです。法然上人の時代は、天変地異があつて、明日をも知れぬ命だったけれども、今はそうでもない。それを法然さんと同じことを説くというのは、少しおかしいのではないかと思います。

そういうことを申し上げて、次に、先生のお話を伺いたいと思っています。

阿満 浄土は大事ではないかという端のお話を伺いました。あるいは法然上人の時代に法然上人が説かれたことと、同じようなことを拘っていいのかわからないとお話を伺いました。あるいは自然に帰れということが一つの心の定めであるのではないかと伺いました。私は少し意見が違いますが、梶村先生がこういうご心境になっておられることをとても尊いと思います。それは法然上人の教えに導かれてこういう結論に達せられたのだと思います。

『徒然草』の中に法然上人の言葉がございます。「往生は一定と思えば一定、不定と思つたら不定だ」。自分が一定だと思いつたらそれは決まるし、自分で悩みがあつて、不定、往生するかどうかかわからないと思つてゐる間は、往生は定まらないという言葉です。それは宗教は、主観的事実だということを物語つてゐると思ひます。

それは、先ほど梶村先生が、宗教は主観的事実。だから客観的に証明しようということ、それは無茶な話です。主観的に自分がどういふうに納得していくのかが一番大事なことだと思ひます。

法然上人が念仏という教えを我々に残されたのは、我々の主観がいかにも頼りないことをご承知であつたからです。冒頭に法然上人が「我が身を振り返れ」ということを残された。念仏の教えと同時に、それ以上に我が身を振り返ることが大事だということを強調しておられたことの意味を申し上げました。自分がどういふ人間であるかということを私どもはどういふうに納得するかです。

先日、東京新聞を読んでおりましたら、霊長類学者の河合隼雄さん、お猿やチンパンジ

ーの研究をなさっている方が、なぜ、あなたは霊長類の研究に乗り出したのかと聞かれて、
こういうふうにおっしゃっています。

自分の知人に中国でたくさん人を殺してきた人がいる。たくさん人を殺してきたけれども、戦争が終わって田舎に帰ってきたらたくさんの人を殺してきたことをころつと忘れて、
実にいいおじいさんになっていたそうです。つまり善悪のスイッチがきれいに切り替わる
人がいる。善悪が変わる人間がいる。人間は一体何なのか、と。

河合さんはそれが動機になって、人間とは何かということを知りたいと思って、霊長類
の研究に入っていた。最初は、お猿さんやチンパンジーの世界は縄張りがあつて、そし
て順位による秩序を守ることが絶対の事実、否定のしようのないような事実とずつ
と観察の上でそう思っていた。

あるとき、ボノボとかゲラダヒヒという類人猿に会うと、彼らは違ったグループと出会
つても、絶対戦争しないと云います。そして、出会ったもの同士が仲良くなって、また暮
らしていく。争いということを一切しない霊長類がいると、いうのです。

片方では、お互いに縄張りを争い合つて、しかも順位を決めて、支配の体制を決めてい
る猿もいるけれども、全く違う類人猿がいることに気が付いたと言います。

ということは、人間は争いをしなくても生きていける遺伝子と、争いがあつて初めて生
きていける遺伝子の両方を受け継いだのではないか。だから自分にとって、猿や類人猿を
研究するのは、人間とは何かということを研究したいがためでした、と述べておられます。

僕は、河合さんのこの話を聞きましたときに、夏目漱石の『こころ』の中の先生の話を
思い出しました。『こころ』の中の先生は、世の中には悪人という人はいませんよ、悪人

といういかにも鋳型にはまったような人間はどこにもいない、善人が突如、悪人になるからそれが恐ろしい、と言っています。

河合さんは、たくさんの人を殺してきた、いわば悪人中の悪人が突如、いいおじいちゃんになるということを、漱石は、善人が悪人になるということを問題にした。つまり、善悪ともに自由に使い分けられるというよりも、どういう条件が加われば、人は何をするかわからない、そういうあり方について、漱石は鋭い考察を進めていくわけです。

漱石は、自分の心の中をよくのぞいてみたら、二辺平行せる三角形があると云っています。三角はちゃんと三角になっているのに、自分の中の三角形は平行している。平行しているけれども、自分ではそれが三角形だと思っているんだ。

こういうことを言って、人は皆、不可解な自己を持って生きている。その不可解な自己は、しかもどういふふうに活動するかわからない。それは人間にとって一番の問題なのだと言っています。

それが僕は、法然上人が問題にされた凡夫のあり方、つまり煩惱具足の凡夫はそういう、人間のあり方のおっしゃっていたに違いないと思います。それで私は、そういう煩惱具足の人間、他人ではなく、自分がそういう煩惱具足の凡夫であるということがわかってきたときに、初めて念仏ということの意味がわかってくるように思います。

先ほどの梶村先生が「浄土はよくわからない」とおっしゃったのに合わせて、少し私の了解を申し上げて皆様のご批評を仰ぎたいと思います。

私は、阿弥陀仏という仏様は、仏像の形で存在しておられるわけではないし、西方浄土におられるわけでもない。私が南無阿弥陀仏と言うときにだけ私の中に存在する、そういう

う仏様だとあるときから了解しました。

阿弥陀仏を自分の外に立てて、その外に立てた阿弥陀仏に手を合わせている限りは法然の仏教、あるいは仏教の本質は我々とは無縁だと思えます。自分が念仏をするときに、阿弥陀仏が私の中で働いてくれる。つまり阿弥陀は念仏になっている。名前になっている。それ以外、どこにも阿弥陀様はいらっしゃいません。

阿弥陀仏は、南無阿弥陀仏になっているとおっしゃっているわけです。自分は、名前になっっているんだ。ということは、我々がその名前を唱えたときに、私の中に阿弥陀が働く。私が念仏をしなかったら、阿弥陀仏はどこにもいらっしゃいません。それが私にとっては大きな念仏を信ずるということの内容になったわけです。

そうなると、お浄土は一体、何なのか。私はお浄土は、人間の悲願、浄土は浄められた土と書いてあります。人間の願い。これはどうしようもないぐらい、色々な願いがあります。その悲願が最も清められた形を取っているものとして浄土を受け止めてもいいと思っております。

でも、私にとっては、浄土があるかないかは、梶村先生とは違った意味でしょうが、余り大したことではありません。自分が念仏ができるかどうかです。自分が念仏をしたら、念仏が私に力を与えてくれます。それをずっと実感してきました。

念仏がなかったら、私は生きていけない。つまり念仏は私と真実の世界とつないでくれる唯一の方法です。そういう点で、私にとっては、死ねば土に帰るかどうか。そういうことは別にして、私は念仏とともに、念仏の中に死んでいく。だから、私は念仏をして死んでいくでしょう。

念仏によって帰っていくところは、そういうことは心配しなくていいのです。念仏をすることが仏道であって、それをするために肉体が消滅があるだけで、そこから先のことは考える必要はない。ただお念仏ができるようになったということが全てです。

そういうことを先生のお話を伺いながら、感じました。

先生は、瀬戸内さんのお話をなさいました。人の世を超えた大きな世界があるということとは、先生は確かなことだとおっしゃっています。私もそう思いますが、私の言葉で言わせていただくと、人間には大きな物語が必要です。大きな物語がないと、我々は生きていけない。

大きな物語は、科学的に証明できるかどうかということとは関係ないのです。つまり僕たちの日常は、小さな物語をやり取りして生きています。色々な物語をつくって、自分が納得できるようにして人生をやり取りして生きています。

そういう人生に破綻が生じる。その破綻が生じたときに、その破綻をもう一度蘇らせてくれるような大きな物語が必要です。ですから、自然に帰るというのも大きな物語の切れっ端みたいなものです。自然に帰るということも、そういうものでしょう。

そういう大きな物語の中で阿弥陀仏の物語は、本当によくできています。大きな物語なしには生きていけないのが人間ですが、どういう大きな物語を選択するかということは大事なことです。どういう大きな物語を選択するかによって生き方が変わってきます。

ですから僕は、阿弥陀仏の物語という大きな物語と今、どういうふうに自分が出会うことができるかということが大事な問題ではないかと思えます。

(つづく)

連 載

会いたい人 関 容子



藤間勘十郎

さん

①

撮影／タカオカ邦彦

日本舞踊宗家藤間流八世宗家。舞踊家として、振付師として、十代の終りごろから既に名が高かったが、最近もその振付で踊る市川海老蔵一門の九團次さんから

「勘十郎さんはいとも簡単に安々と踊ってみせてくれるんですが、いざこちらがそれで踊ろうとすると、手も足も出ない有様で、天才としか言いようがありませんね」

と聞いている。

私がつくづく勘十郎さんの天賦の才を実感したのは、平成二十六年十一月、明治座の舞踊公演で観た『阿古屋』だった。

歌舞伎では往年の六代目中村歌右衛門、現今では坂東玉三郎以外に演じる者がいない。それというのも、傾城阿古屋が情人平景清の行方を追究され、琴責め（琴・三味線・胡弓の三曲）の拷問を受けるが、その演奏に少しの乱れもないことから無実が証明される……つまりその演奏は生半可な出来では決して通用するものではないからだ。

生前の歌右衛門が

「三曲を勉強してちゃんと弾けるようにしてきたら、（門閥以外の）どんな人にでもあたしは阿古屋を教えちゃうけどね」

と語るのをじかに聞いたことがある。いったい今の若手は何をしているのか、あんな華麗な女方の演^だし物は滅多にないのに、と、もどかしい思いがした。

それを三十代半ばの舞踊家が、三曲を立派にこなし、しかも清元、長唄をアレンジして自らの創作舞踊として素敵な成果を見せたのには驚嘆させられた。

勘十郎さんが言う。

「子供のころ大成駒（歌右衛門）の阿古屋を見てすごい感銘を受けて、ずっとやりたかったんで、中学のころから三味線を習い始めて、同時に学校の箏曲部に入ってお琴も始めたんですが、これがなかなかできなくてね。」

僕が十代のころ、玉三郎さんが阿古屋を初役でなさって、将来いつかきつと僕も阿古屋



『阿古屋』では琴、三味線、
胡弓の琴責めに遭うが、それ
を見事にこなす勘十郎さん。
平成26年11月明治座。

写真提供：明治座



を演じたい、と楽屋で話して盛り上がったことがありました。胡弓は勘十郎襲名のときですから、二十二歳のときからですね。川瀬白秋先生のお世話になりましたが、真剣に通ったほうじゃないですけど、胡弓をいつも身近に置いて、寝ころんだり、本読んだりしながらずっと触ってました。ちょうど手品師がいつでもトランプを弄んでるみたいにして。

琴は、大阪の稽古場にあつて、行けば触るようになっていますが、これが一番大変ですね」歌舞伎の遊君阿古屋は、一番重い鬘や衣裳をつけた上に、大きな組帯あておびが前に来て演奏の邪魔になる。そこをものともせずにもぎと三曲を披露するのが大きな見せ場になっている。

衣裳をつけない素踊りを本領とする勘十郎さんの阿古屋はどんなだろう、と思って観たが、金襴の襦あはけを手にしたり、ちよつと肩に掛けたりするだけの簡素で象徴的な舞台が美しかった。

「もともと人形浄瑠璃の『壇浦兜軍記』から歌舞伎に來た演目ですけど、すごく舞踊的要素があるんです。でも、義太夫でやると歌舞伎と同じことになるんで、清元で語りと踊りの部分を、長唄で三曲の部分を、というふうに作り変えました。

最初は昨年六月に大阪の主催公演で踊りましたけど、すぐに再演したくなつて、十一月の明治座の会の話があつたときに即決しました。舞踊会ではこれ一歩だけ踊るわけじゃないんで、やめときゃよかったと思うくらい大変なんですけど、終るとまたやりたくなる、不思議な魅力のある演目なんですな」

勘十郎さん（本名・藤間良りょう）は昭和五十五年三月生まれ。父は観世流能楽師梅若玄祥（五十六世梅若六郎）、母は三世藤間勘祖（七世藤間勘十郎、藤間高子こうこ）。母方の祖父母は六世藤間勘十郎（二世藤間勘祖）と藤間紫。

昭和五十八年「七世宗家継承の会」で、藤

間凌^{りょう}を名乗って『雨の五郎』を踊ったのが初舞台だった。

昭和六十一年一月からのNHK大河ドラマ『独眼竜政宗』で、政宗（渡辺謙）の幼少期、梵天丸を演じた名子役「藤間遼太」の名は、私の記憶に鮮烈に残っている。

当時五十%近い驚異的な高視聴率を記録しただけあつて、配役を調べてみるとすごい顔ぶれが並ぶ。政宗の両親、輝宗が北大路欣也、お東の方が岩下志麻。羽柴秀吉が勝新太郎、ねねが八千草薫、石田三成が奥田瑛二、徳川家康が津川雅彦と、みんな主役級だ。

「自分の中でも忘れられない記憶となつて残っています。でも病みつきになつて、俳優になりたいなんてことは考えませんでした。高校に入つて、席順で僕の後ろに座つた子がそのオーディションに落ちた子で（笑）、のちに親友になるんですけど、その話になつたらすごく不機嫌になつたからどうしたのかと思つたら、いいとこまで行つたのに落ちて、気

がついたらお前が出てた、というんですけど、僕はオーディションを受けた覚えがなくて、その経緯は今でもよくわかりません。

渡辺謙さんはあれが大きく当つて売り出したような方ですからね、少年時代をつとめた僕のことを憶えていてくださつて、あるパーティーでお会いしたとき、梵天丸の藤間です、と言つたら、あーっ!! 大きくなつたねえ、つて（笑）。嬉しかったです」

梵天丸は小さいころ疱瘡^{ほうそう}（天然痘）を患い、その毒が右眼に入つて酷い痕跡をとどめている。

ある日、守役の片倉小十郎の妻喜多（竹下景子）と不動明王の像の前に立つて、その憤怒の形相を見て驚き、自分の顔と重ね合せて、これは「化け物か？」と喜多に訊ねる。

「いえ、恐ろしいお顔は悪をこらしめるため。外観と異り、お心はお慈悲深いのです」

「……梵天丸もかくありたい」

このせりふは当時一世を風靡した。この場

面を単行本『独眼竜政宗』の写真で見てみたら、不動明王をヒタと見詰める利発そうな片方の眼と、半開きの口許が、半世紀以前、天才子役と謳われた勘九郎坊や（十八代目勘三郎）にちよつと似ていた。

「その後、自分で自分の右眼を刀で刺すところまでが僕の出番でした。短い出番の割には強烈な印象だったらしくて、今でもたまにおつしやる方に出会います」

勘十郎さんは振付師という仕事に誇りを持ち、「楽しい職業だと思つ」と言つ。

「母も僕も自分で踊ることより振付のほうが好きですね。母の時代は先代の中村屋（十七代目勘三郎）、歌右衛門、梅幸さんという錚々たる名優がいらしたところで、僕が振付師になったときのトップは、京屋（雀右衛門）、天王寺屋（富十郎）、山城屋（坂田藤十郎）、神谷町（芝翫）とか、みんな年齢的にも大先輩ばかりでした。」

振付師の楽しみは、自分で考えた振りを、そういう名優たちが演じてくださると、自分の期待以上にパーツと盛り上がってお客様が大喜びしてくださる。これは作り手にしかわからない充足感でしょうか。考えがドンピシヤと当たるとね、それみたことか（笑）っていう優越感。これが振付師の醍醐味でしょう」

ずっと以前、歌舞伎座の舞台稽古を見に行つたとき、最前列中央の席に陣取つた勘十郎さんの母上がまだお若いのに扇子を小脇に構えて歌右衛門や富十郎にあれこれ指示しているのを見て、ちよつと驚いたことがあつた。

「偉そうに見えましたか？ 小娘が（笑）。

皆さん誤解なさつてますが、歌舞伎舞踊の型、いわゆる振付は役者の家に残っているのではなくて、われわれ踊りの家に伝えられているものなんです。それでたとえば今度歌舞伎座で『隅田川』を勘十郎家の振付で踊るということが決まると、偉い方もうちにお稽古にみえて、おさらいをしたり、またそのとき

NHK大河ドラマ『独眼竜正宗』（昭和61年）で正宗の幼少期の梵天丸を演じた頃の勘十郎さん。



の情況で振りを考えて申し合わせをするわけ
です。

新作とか、古いものを復活するときは振付
師の腕の見せどころで、まず役者さんの前で
「振り見せ」というのを行います。

祖父は、最初は昔の六代目梅幸さんのお弟
子で、尾上梅雄という役者でしたが、名優六
代目菊五郎に才能を見込まれて藤間宗家に養
子に入った人で、この六代目さんが祖父を立
派に育ててくれたんだと思います。

振り見せのときになると、六代目菊五郎は

どんな作品を作るんだ、って十五代目羽左衛門とかそのころの偉い役者さんがみんな見に来る。六代目さんの代わりに祖父が真剣に踊って汗かくと、お前が踊るんじゃないから汗かくな、って。涼しい顔で踊ると、そんなくたびれない踊りは俺は踊りたくねえ、って六代目さんが(笑)。

それで『将門』^{まさかど}で、滝夜叉^{たきやしや}が六代目梅幸、光圀がかの美男で有名な十五代目羽左衛門という、人気役者の競演なのに、さっぱり客に受けない。おめえの振りが悪いからだ、って祖父が叱られて、受ける振りを今すぐここで考えろ、できないんなら死んじまえ、って(笑)。それで十五代目さんには両手を胸のあたりで振る癖があったらしくて、それを踊りに取り入れたら翌日から大受けだった。それから祖父は十五代目さんの信頼を獲ち得たそうです。

つまり振付師というのは、役者それぞれの体型とか年齢とか体調とか、癖もふくめて、

その役者が最もよく見えるように、舞台が映えるような振りを考えるのが、仕事なんですね」

振付師の立場となれば、どんなに若輩であっても、役者からは立てられる。そのかわり、ぼやぼやしてはいられない。

「僕が中学生のとき、天王寺屋(富十郎)とはどんなに年が離れてるかわからないくらいなのに、母親から今回はあんた一人で振付師としてついて行きなさい、と言われて、えっ、っていう感じ。みんな、なんでこんな子供がいるんだ？ みたいになったとき、普段は僕のことを良ちゃんと呼んでる天王寺屋さんが『ねえ、藤間さん、ここどうやんの？』って訊いてくださった。その時、たまたま振りを覚えていたから事なきを得られ、ほっとした事を今でも覚えています(笑)。でもそれで周りの方の僕への対応が変りました。有難かったと思っています」

(この項つづく)

他人が「自分と」逆なことを見つめるものではないし、他人のしたこと、しなかったことを見つめるものでもない。自分のしたこと、しなかったことを見つめるべきである。

秋尊【ダンマバダ第五〇偈】試訳

自分のしたこと、しなかったこと

「身についた癖だから、つい出るんでしょうね。お帰りになるとき、ドアが開かずにお困りになっているお客さんがいらっしゃるんですよ」

久しぶりにお向かいのバーであれこれしゃべっていたら、どんな会話からだったか、マスターが店の入り口に視線を向けながらそう言った。

その店は私が管理する地藏堂と小路を挟んで斜め前にある。目立たぬ小路にありながらもオーセンティックなその店は、外観も内装もシックで、一枚板であろろう木目のきれいな長い長いカウンターが店の風格を物語っている。

八月の地藏盆の折、地藏堂からその店の外壁に取り付けてある雨水用の排水管に長い竹竿を渡して結びつけ、いくつも提灯を吊り下げてみた。例年、提灯を吊り下げていた小路の入り口が諸般の事情で吊せなくなり、致し方なくバーの排水管に竹竿をくくりつけてみることにした。

今年の地藏盆は日曜日であった。店はお休み。マスターにお断りもできぬまま提灯を吊すことになった。できれば来年以降もそうやって提灯を吊してみたい。まずはマスターのご了解をと「じつは、この間の日曜日が地藏盆でして、これこれこうで」と事情説明かたがたカウンターに座ったというわけだ。

一通りの会話の後、マスターは開かないことがあるという店のドアのことを

語り出した。見たところレバーハンドルで開け閉めをするタイプのドア。私には普通のドアにしか思えなかった。どこか渋いわけでもない。ハンドルを下に回せば開くはずである。なのにドアが開かずに困る人がいるという。何が問題なのか、意味が分からないでいると、マスターが種明かしをしてくれた。

「レバーの上に回し鍵がありますでしょう。その取っ手を無意識に回してから、ドアを開けようとするお客さんがいるんですよ。自分の家から出掛ける時と同じ感覚になるのでしょうかねえ。きつと、いつも玄関の鍵を閉めていらしてら、回し鍵を開けてからドアを開ける癖が身についていらしゃるんですね。でも、店のドアはそもそも鍵が開いてますでしょ。鍵を開ける癖が、逆に開いている鍵を閉めてしまうんですね。ドアを開けようにも先に鍵を閉めてしまうんですから、開くわけがないんですよ。もっとも、それで帰るの思い直していただいで、もう一杯飲んでいって下さればありがたいのですが……」

自分には気が付かない癖か、言われてみると自分にも思い当たる節があつて、妙に納得した。なるほど「なくて七癖」というわけだ。

ところで、この「なくて七癖」、はじめは「難なくて七癖」と使われていたそう。難点がないような人にも癖は意外とあるものだ、ということだろう。

それにしても、自分では気付かない自分の癖が、自分を守っていたり、逆に自分の行く手を阻む障害になっていることもあるのだと思うと、いささか怖く感じた。

法然上人のご法語『登山状』のなかに、「分にしたがいて悪業をとどめよ、縁にふれて念仏を行じ往生を期すべし」という教えがある。「分にしたがいて」で「各々出来る得るかぎり」というものの、自分では「善」と思っていること、それが気が付かぬうちに「悪」に変わっていたら身も蓋もない。

未読だが『一億総ツツコミ時代』という本が出たという。SNSが発達したせいか、今は誰もが評論家になったつもりで、ひとこと言いたい時代なのかとも知れない。でも、そう言う時代だからこそ「自分のしたこと、しなかったことを見つめるべきである」という釈尊の言葉を高く掲げておきたい。

そうそう、地藏盆の提灯の件はマスターの快諾を頂いたばかりか、明かりをともす屋外コンセントまで拝借できることになった。今から来年が楽しみだ。

(袖山榮輝)

東日本

大震災被災地を訪れて の 6

成田淳教

東京世田谷感応寺住職
関東フロッグ浄土宗青年会理事長



浄土宗東京教区災害対策委員会が企画した被災地でのイベント風景。

八月二十三日に仙台市若林区荒井7号公園
応急仮設住宅において、仮設住宅の方と、荒
浜地区出身の被災者の方々の集まりである若
松会の方々と共にバーベキューをしました
た。これは私も委員を勤めている浄土宗東京
教区災害対策委員会で企画したものでした。

浄土宗東京教区青年会では、若松会の方々
を対象としたイベントを何度か行っており、
手作りキャンドルや、写佛会、香袋の作成な
ど、楽しんでいただけるような企画をしてま
いりましたが、昨年最後のイベントの時に
「次は何しましょうか？」と参加された方と
お話をしていて、何かみんなで食事するよう
なイベントがいいということで、その時に
「次はバーベキューにしましょう」と約束を
してきたもので、かなり時間がたってしま
いましたが、やっと実現できたものでした。

当日は浄土宗宮城教区青年会の方々、「茶
房えにし」の方々にもお手伝いいただき、仮
設住宅の駐車場にバーベキューと流しそうめ

んのセッティングをし、テントやタープを張
り、机と椅子を並べて行いました。

自前で持っているものは、東京から運び、
不足すると思われるものは仙台でレンタルし
ました。

あいにく、当日朝は雨が降っており予想さ
れた人数より三割ほど減ってしまいました
が、それでも三〇名以上の方にご参加いた
だき、こちらのスタッフと併せて五〇名以上で
共に楽しい時間を過ごせたと思います。

近況をおうかがいすると、それぞれ、新た
にご自宅を建てられたり、災害復興住宅にう
つられたりと生活再建に向け進まれていると
のことでしたが、それはそれで以前の戸建て
の住環境とは異なる生活であったり、元々の
コミュニティの方々がばらばらになつてい
たりで、前進はしているもののその段階ごとに
新たな苦労があるとのことでした。

今回のようなイベントがあると、皆が集ま
って話したり、情報交換ができたり、なによ

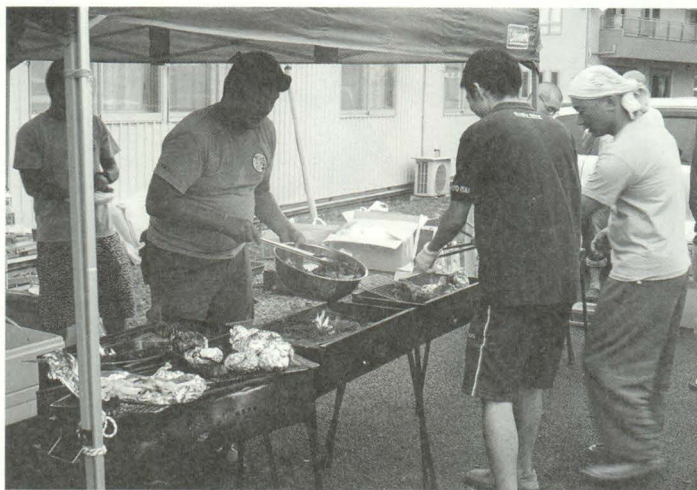
りも、元々のお仲間の方々と楽しく過ごせる
ことが良いと仰っていただきました。

いろいろな団体や個人が震災後に被災地の
方々のご縁を結ばれたことと思います。地元
の方々が集まるきっかけになるための今回の
ような企画や、あるいは、お手紙などでも、
区切りを付けずに、結ばれたご縁を大切にし
ていくことが、全体の復興と良い未来のため
になるのではないかと感じました。



バーベキューは、楽しみながら、情報交換できる場となった。

なりた　じゅんきょう　東京教区玉川組　感応寺住職
昭和50年1月、世田谷大吉寺に生れる。平成13年より感応寺住職
平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土青災害対策委員
平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）



東京からと地元宮城の青年会員が活躍した。



トルコと日本

森清鑑

第三回

友好の絆2



帰国

遭難から五日目の明治二十三年九月二十一日、日本の軍艦八重山が紀伊大島に到着した。前日にドイツの軍艦が生存者を神戸に運んだ後であった。しかし、八重山の三浦艦長は立派な人で、途中、海に浮かぶ一遺体を収容し、到着すると、雨の中、埋葬式に参加した。明治天皇からは三浦艦長宛に生存者を東京の慈恵医院に連れてくるよう電報を受け取る。そこで、二十二日身元確認のため残っていた二人のエルトゥルルー号乗組員を乗せ、神戸に向かった。

その日も漂着遺体十四名が発見され、それから連日、二十〜三十名の遺体を収容することになる。神戸に着いた三浦艦長は、神戸にいる六十九名を東京に連れ戻そうとするが、重傷者二十三名の今すぐの移動は危険だという医師団の意向を尊重。明治天皇もその知らせを受けて、神戸で手厚くもてなすよう指示し、

東京から赤十字の医師団を派遣する。特に赤十字などから派遣された数名の看護婦の、献身的な看護には、トルコ生存者の涙を誘うものがあつた。三浦艦長は用意してきた衣服と絹のハンカチ六ダースを生存者に支給。かくて順調に回復した生存者六十九名をトルコ本国に丁重に帰すよう、天皇は軍艦「比叡」と「金剛」を神戸に派遣する。両艦は十月七日、横須賀を出港し、十一日に生存者を乗せて神戸からトルコに向けて航行することになる。無論、明治天皇からの親書、贈り物を携えて。

秋山真之

比叡と金剛は、当時としては日本の最新鋭軍艦である。香港、シンガポール、コロンプ、スエズ経由でトルコに向かった。そして、興味深いことに、この船には、練習航海を兼ねて、海軍少尉候補生も乗船していたのである。秋山真之もその一人であつた。

秋山真之。後に日本海海戦でロシア、バル

チック艦隊を撃滅したときの、作戦参謀。彼は、大学予備門（一高）途中から海軍兵学校に入學。丁度、トルコ軍艦遭難事件の明治二十三年（一八九〇）に兵学校を首席卒業。兵学校では卒業後、長期の遠洋実習航海がある。この時の一七期生は、「比叡」、「金剛」に乗り込み、遭難者をトルコに帰還させる任務も兼務していたのである。秋山真之もその一人であった。

彼は、司馬遼太郎の『坂の上の雲』の主人公の一人。後年、ロシア、バルチック艦隊撃滅の立役者となる。秋山は、ただの秀才ではなく、作戦目的の達成をしつかり捉えた、希有の人であった。大学予備門では、郷里、松山時代からの親友、正岡子規の紹介で夏目漱石とも親交を結ぶ。日本海海戦（一九〇五年明治三十八年）で打電した彼の電文、「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊はただちに出發、これを撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し」（見通しが良いことは、当時砲

弾戦の必須条件、波が高いということは、着弾猛訓練を積んだ我が方に有利という意味を暗に込めている）。そして司令長官東郷平八郎の連合艦隊解散の辞。終わりに「古人曰く、勝つて兜の緒を締めよ」（猛訓練は積むが、むやみに戦つてはならない）など、彼の草稿は秋山文学として名高い。徹頭徹尾、東郷元帥は、「その知謀湧くがごとし」と彼の能力を信頼し、海戦で、彼に賭けたのである。その秋山の海軍奉職の、初仕事がトルコ遭難者を本国に送り返すことであった。なんという縁か。

後年、この日露戦争の勝利に、オスマン帝国（トルコ）中が沸き立つ。我がことのように歓喜し、快哉を叫ぶ。このことは、遭難事件がもたらした友好の絆に加えて、日本と同じようにオスマン帝国もロシアの南下政策に直面、ロシアと激しい戦鬪を繰り広げてきたからである。クリミア戦争（一八五三―一八五六）。それまでも広大なオスマン帝国領土

は、ロシアも含めた欧州各国に浸食され、あるいは独立し、失ってきたが、最後がロシアの南下政策であり、かつてオスマン帝国の国土であったウクライナは、侵略され、黒海に突き出たクリミア半島での激戦。この時には、帝国の領土をロシアに横取りされてなるものと、イギリス、フランスも援軍を派遣し、ロシアに対抗した。ナイチンゲールがイギリスから看護士を連れて、イスタンブルに隣接する黒海側の後方支援地点で活躍したのもこの時である。ナイチンゲールの偉大さは、ロンドンに帰ってから、戦場医療の在り方を体系化、理論化し、頑迷な官僚を説き伏せて、いつてみれば、医療制度を確立したところにある。このため、イギリスでは、彼女を統計学の祖とする声もある。かつて、地中海を席卷したオスマン帝国海軍は、アブデュルハミト二世の頃には、見る影もなく、エルトゥール号の日本での遭難も、そうした背景を背負っている。

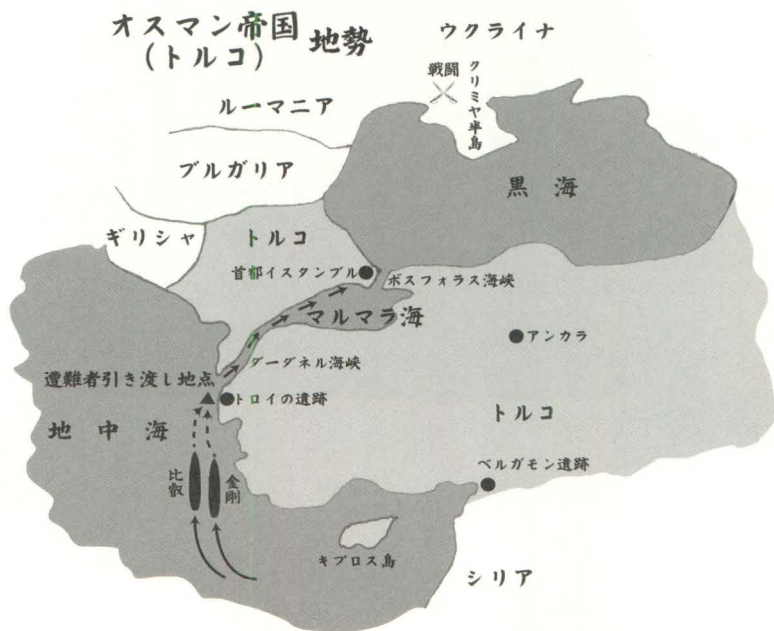
国王と面会 大いなる歓待

六十九名の串本トルコ軍艦エルトゥール号遭難者を乗せた、秋山の乗る軍艦、「比叡」と「金剛」は、無事地中海に出てトルコに着く。目指すは首都イスタンブル。ところが地中海とマルマラ海を結ぶダーダネルス海峡で足止めされる。時は一八九一年十二月二十七日。クリミア戦争終了の一八五六年からトルコ内のこの海峡は、全ての外国船の通行を禁止するという処置が取られていた。オスマン帝国（トルコ）は、クリミア戦争以降、地中海側からの敵国侵入を防ぐべく、びりびりしていたのである。

比叡と金剛は、やむなくベシカ湾（トロイ遺跡近く）に停泊。ここでトルコ遭難者六十九名との涙の別れとなる。彼等は、皆、日本の水兵に抱きつき、頬を擦りつけ、涙を流していた。前夜、艦でトルコと日本の士官同士の祝賀会が行われ、友好の祝杯を挙げている。

そこで日本側の田中艦長は、これまで幾度も通達してきたことだが、明治天皇の国書と贈り物をオスマン帝国（トルコ）国王アブデュルハミト二世に直接届けるまではこの任務は終わらないと述べる。国王は、送り返されてきた生存者や交流のあった士官達から、遭難の模様や、いかに日本の人々が身をなげうって助けてくれたかを初めて知り、驚きと感謝に涙する。特例処置。日本の船籍に限り、ダーダネルス海峡通過を認可する。知らせを受けた、「比叡」と「金剛」は、ただちに海峡を通り抜け、イスタンブルに寄港することになる。イスタンブルに着くと、その日からトルコを初め各国の海軍士官が「比叡」、「金剛」を訪れる。そして皇帝から明治天皇からの贈り物を早く見たいとの要望があり、田中艦長は金製の太刀や大花瓶などを渡す。士官宿舎として宮殿があてがわれ、至れり尽くせりの歓待を受けることになる。

年明けとともに、皇帝アブデュルハミト二



◆トルコ地勢・比叡・金剛の経路

世との会見が行われる。その日、艦長以下士官達は、提供された専用の馬車に分乗し、宮内庁正殿に案内される。首相以下全ての高官列席。大歓迎である。皇帝は、心底からの感謝を述べ、田中艦長は明治天皇の親書を手渡す。こうして、行く先々で歓迎の嵐を受け、滞在は四十日間に及ぶ。二月に日本に向け出港。アプデュルハミト二世は刀、拳銃、サラブレッド馬などの明治天皇への贈り物を贈呈。特に皇帝の意向を伝えるために、トルコの特使も乗せる。こうして再び遠洋航海。「比叡」、「金剛」の両艦は一八九二年（明治二十五）五月十日に帰国した。田中艦長は早速明治天皇に拝謁。皇帝との謁見の様子、膨大な贈り物の子細、大歓迎の状況などを報告。そしてトルコの特使は皇帝の意向を伝えた。

義捐金

さて、話を元に戻そう。エルトゥルルー号遭難の次第は、事件後すぐ、新聞各社の報道

することとなり、義捐金の募集広告が掲載された。全国から膨大な義捐金が集まり、それらは負傷者の手当、記念塔、墓地敷設などに充当された。義捐金は、これにとどまらず、民間団体や個人が独自に集め、提供。例えば、芝増上寺の大殿では五百八十余名に及ぶ犠牲者の霊を慰める大法会が催され、その場で義捐金を募った。そして個人の活動家として際立つ人物が登場する。それが若千二十四歳の山田寅次郎であった。

【参考文献】

「明治の快男児トルコへ跳ぶ」山田邦紀、坂本俊夫著 現代書館
「エルトゥルルー号の遭難」寮美千子著 小学館
「トルコ世界一の親和国」森永堯著 明成社
その他、ウィキペディアなど

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十二回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、博士号取得へ6



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼル万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使のクーデンホーフ伯と出会う。また同じ宗門海外留学生の荻原雲来から、ヨーロツパ初の比丘ニャーナティロカ存在を知らされ強い興味を覚える。一方、留学期限が切れ何とか延長を許されるなか盟友・雲来が博士号取得して帰国。一人異郷に残された海旭はロイマンから博士号取得を促され準備にかかったところへ母トナ逝去の悲報で気持ちが萎えかけるが、当地へやってきた気鋭の仏教学者マックス・ヴァレザーと出合い意気投合。彼の依頼を受け大乗仏教の原典である龍樹の『中論』の独語訳を手伝うことになる――

恐るべし、ヴァレザーの 仏教理解力

師のロイマン教授の仲介で若き仏教学者マックス・ヴァレザーと出会った渡辺海旭は、たちまち肝胆相照らす仲となり、ヴァレザーが企図していた龍樹の『中論』のドイツ語訳の手伝いを引き受けた。しかし、当初海旭には内心不安があった。学者に『中論』のような深遠なる超論理（メタロジック）が理解できるだろうか。さらにはそれをドイツ語のような論理的言語で翻訳できるのだろうか、と。ところが海旭が話してみても驚いたことに、すでに彼はサンスクリット、チベット語による『中論』解釈本をほぼ読破、同書の本義については十分に理解をしていた。そして「翻訳力」においても尋常ではなかった。『中論』を読み解くには鳩摩羅什の漢訳注釈本が最も

有力とされるため、まず三年をかけて漢語を習得。その上で、不備と瑕疵が多いとされるウィリアム華英辞典をたよりにとりあえず英語に翻訳、それをさらにドイツ語に置き換えるという作業をしてきたのだという。複雑かつ誤訳が生じやすい作業をしながらも、よくぞここまでできたのだと感心するほどの出来栄で、十のうち九はほぼそのまま使える訳だった。

そうはいっても、原書が原書だけに「補足」は必要で、たとえば「非有非空」は「いっさいのものは有るのではなく、無いのでもない、いずれにも偏らないものであること。それすなわち『中道』のことである」などと補うこととし、それが海旭の主たる作業となった。

おかげで、早くても半年と思っていた比定作業は、わずか半月で終えることができた。嬉しい誤算だった。折しも淡い黄色の小さな花をつけたリンデンバウムの芳しい香りが夏のそよ風に乗って漂い来たり、窓辺の鉢植え

には雛菊美人草が葉に夜露を留め、どこからか軍楽隊の演奏が聞こえてくる、そんな長閑な初夏の日曜日の朝、海旭とヴァレザーは、ついに『中論』の最後の偈を訳し終え、限らない法悦の瞬間を共に味わったのである。

海旭にとってはなんとも濃密な半月間で、一年にも思えた充実の時だった。いっぽうのヴァレザーはそそくさと寄宿していたケールのホテルを引き払うと、挨拶もそこそこに余韻も残さずにベルギー第三の都市ヘントへと旅立っていった。いかにもこの男らしい振る舞いだった。『中論』のドイツ語訳を手土産にひっさげ、同地の仏教哲学者トゥ・ラ・ヴァレ・ブサンと共に、仏教哲学体系の第二篇を上梓するためであった。

海旭は蓬髪顎鬚の碧眼仏教学者と切磋琢磨したロイマン教授の研究室に一人座って、共に格闘した『中論』と龍樹のことを想った。釈迦没後仏教が俗流化の危機にあった時、もし龍樹が現われなかったら、バラモンの教

義を継承したヒンドゥー教の攻勢をうけ、釈迦の仏教はそこで息絶えていただろう。それを蘇生どころか大乘仏教という形で一層隆盛をさせたのは、龍樹が『中論』で「空と縁起」の理論を打ち立てたからだ。すなわち龍樹以前は、「縁起」は単純な一方向の因果で説明されてきた。たとえば「生」があるから「死」があると。これに対して龍樹は、あらゆるものが相依・相関的な関係の中で成り立つことこそ「縁起」であると捉えなおした。たとえば、「生」と対にあるとされる「若さ」も、より若いものと比べれば、「死」と対にあるとされる「老」になる。従ってあらゆる物事は固有の性質をもたず「空」であると主張したのである。

思えば龍樹が「空と縁起」の理論を打ち立てなければ、大乘仏教も生まれずそれが中国を経て日本へやってくることはなかった。日本で龍樹が「八宗の祖」と呼ばれ、わが浄土宗を含む多くの宗派で敬われている所以でも

ある。しかし龍樹の「空と縁起」の理論が行き着いた先のわが日本は廃仏毀釈によって消滅の危機を脱することできないでいる。今こそ日本の龍樹が出なければならぬ。龍樹には遠く及ばないが、そのために自分はこの異境へ来ているのではないか。この三か月のヴァレザの頑張りを見習い彼の爪の垢でも煎じて飲んで一層励まねばならぬ。まずは博士論文だ。

海旭はヴァレザが去った遠く北の方を望んで合掌すると、仏教改革運動の同志である高島米峰への追伸にこう書き記した。

「氏（ヴァレザ）の稿は、恐く此クリスマスを以て了らむ。的是、惰眠を貪りて、死せるが如き独逸の哲学界に、必ずや多少の活気を起し来るべきもの」「今独逸で仏教語学者は少くない。偉大な人物も此方面には随分ある。然し仏教哲学特に大乘哲学者として、光輝ある未来を有するのは、先此人だらう」

その予言どおり、ヴァレザによる『中論』

の独訳はドイツ哲学界に新風を巻き起こし、彼自身も後にハイデルベルク大学で教鞭をとり、学者として大きな足跡を残すことになる。

博士論文、 ついに脱稿

かくして海旭はようやく博士論文に本腰を入れることができるようになった。博士論文のテーマは初期大乘仏教の代表的經典である華嚴經の掉尾を飾る「普賢行願讃」の同定研究だが、原典史料が幾種類もあつて突合のための予備作業が相当にかかる。残された時間は一年もなかったが、自分でも驚くほどにはかかった。おそらくヴァレザーの『中論』の独訳を手伝ったことで、根気のいるこの「突合作業」が身体と脳にしみついてしまったからだだった。

思えば、ドイツ留学以来のテーマであった。

宗門の先輩で京都知恩院浄土宗第五教校長の土川善徴と遙かインド洋を超えて音信を交わすなかで、日本に「普賢行願讃」のサンスクリット原本の写本があるとの情報が伝えられ、土川師からそれが送られてきたことが発端だった。ロイマン教授の紹介で、ケンブリッジ大学をはじめヨーロッパ各地の大学・研究者のもとにあつた原典を取り寄せ、各種原本を突合・比較するなかで、もともとオリジナルに近いと認められたのは日本のサンスクリット本だった。

海旭はそれをもとに日本語で論文を書き日本の仏教界へ問題提起をした。だがさしたる反響はなかったのも、そのままにしておいたのをロイマン教授の勧めで、今度はドイツ語で一大論文にブラッシュアップすることになったのであった。サンスクリット学の泰斗マックス・ミュラーの日本人門下生・笠原研寿が三十年も前に試みようとしたものの、結核に冒されて果たせなかったことを知ったの

も、海旭を博士号にいつそう邁進させる気にさせた。

こうして海旭は、母トナ急逝とヴァレサーの『中論』ドイツ語訳の手伝いで一時中断していた博士論文へ向け、「普賢行願讃」のサンスクリット、ネパール語、チベットなど

の写本原本を照合する根気のいる作業を再開。そして提出日に半月以上も残すという余裕をもって、ついに論文は完成したのだった。

(この項づく)

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替0018012145231



浄土誌上句会

●品

〈特選〉逸品と値札に書かれ熱帯魚

高島 恭子

幾種類もの熱帯魚の容器が、所狭しと置かれていた。一つ一つに値札が貼られていて、その一つは特に高いのだろうか。わざわざ逸品と書かれている。早く売れて行くのか、いつまでもそこに置かれているのか。

〈佳作〉染み少しあるどぜう屋のお品書き

斉田 仁

品数をひとつ増やして夏料理

鳥羽 梓

刃物市品定めして背の寒さ

石原 新

●格

〈特選〉体格も気性も父似卒業子

浜口 佳春

小学校の卒業生だろうか。大きくならにつれて、父の体格にだんだん似てきたのだが、そういう気性もまるで父に似ている。子供

が親に似るといふのは当然だが、この子は特に父にそっくりなのだろう。

〈佳作〉

別格本山闇のどこかに墓蛙

河野道弘

格好の良い胡瓜から売れてゆく

茂田佐知子

格好のよくてかぼちやを絵手紙に

増田信子

●自由題

〈特選〉

搾乳の牛に首振る扇風機

浜口 佳春

搾乳器を使っているのか、手で搾っているのか。牛舎には扇風機が回っている。音楽が流れているかも知れない。牛にストレスを与えないような手だてが、あれこれ講じられているのだ。すべては搾乳のために。

〈佳作〉

少し汗して親子井なと言っ

内藤隼人

日盛りを来てほの暗き人形館

小林苑を

吹くがままつねりとなりぬ大花野

東 保



銀座自由題

兼題

浄土誌上句会のお知らせ

誌上句会 〈編集部選〉

■品

ハンカチの手品がふつとはしまりぬ
安居猫どこか気品のあるごとく
幕末へ品川宿の大西日
身の芯に落ちて絶品なる冷酒
お品書き達筆を見て栗の飯
ちびたちも品良く坐り藍浴衣
終戦日祖父の遺品を陰干しす

■格

格調をもつて動かぬ藝蛙
骨格をすこし歪ませ胡瓜揉み
片影に格子戸のある静けさよ

締切・二〇一五年十月二十日

発表・『浄土』二〇一五年十二月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

格子戸のちらちら撒水車が通る
格言のように峰雲立ちにけり
格子戸を開ければ真昼夏木立
格子戸の蕎麦屋に回る扇風機
本格も変格も積み三尺寝

■自由題

凹む日や枇杷を食べれば枇杷の種
炎昼のカバンの底に鳴る電話
人形に五臓六腑が無くて夏
六月の迷路が地下の駅にある
狛犬の口が藪蚊を吐きにけり
はつなつの仏具屋にある招き猫
路地裏に日傘傾けてすれ違う
裏山の古刹を包む著我の雨
三球目捕手の股間に熱砂舞ふ
甚平のどこからどこへ隙間風
夏の夜のチェスそれぞれの駒の影

入谷 萌

横田留美

上山亜希子

松宮波留子

遠山光彦

笠井亜子

柴田千代

時田 実

森島 瞳

上野亮太

中野幸雄

井口吾郎

小林信雄

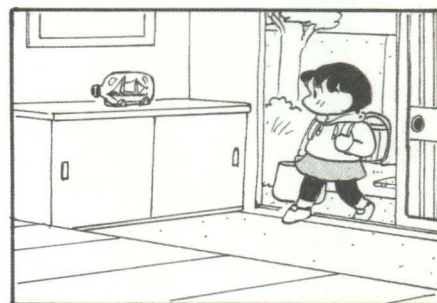
中島敏広

青柳智彦

武田暢久

さっちゃんねネッ

かまち♡ひろう



編集後記

長雨に火山地震とかがむ秋

岱潤

「曇り空ならいい」と書いているのは、精神科医の和田秀樹氏だ。人生プラスマイナス・ゼロで終わればいいという考え方をしましようにと氏は言っている。晴れ晴れした気持ちで締めくくるのはムリなら、まあ曇り空でイイじゃないかと言うことだ。

人生いいことばかりは続かない。必ず悲しみや辛いことがある。雨にたとえながら、霧雨のような悲しみなら詞でも書いて感傷に浸っていい。でも笠が必要なくらいの悲しみなら、寄り添ってくれる人がほしい。それがスコールのよ

うな土砂降りの悲しみなら、通り過ぎるまで待つしかない。先日お彼岸で六波羅蜜のことを話そうとしていたら、三番目の「忍辱行」がやけに引っかった。解釈本はみな「耐えて待て」としか書いていないが、ならばどうして「忍耐」ではなかったのだろうか。梵語クシャンティを訳すときなぜ辱めの字を使ったのだろうか。それは土砂降り級のどうしようもない悲しみの時、それが通り過ぎるのを待つ間、人はどんなにカッコ悪くても、みつともなくても生きていくことが大事だから、生きていなくてはいけなから「忍耐」ではなく「忍辱」にしたのではないだろうか。そんなことを電話相談で

自殺願望の方と話をしながら考えていた。絶望的な雨も必ずやむ時が来る。やめば多少の晴れ間もあるだろう。曇り空がちようどいい。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十一巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年九月二十日

発行 平成二十七年十月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了昭

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八七〇二六

振替 〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』 特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安樂寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
肱博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

仏教歳時記

お十夜法要

正式には十日十夜法要の略で、十昼夜を一
期として修する念仏会です。

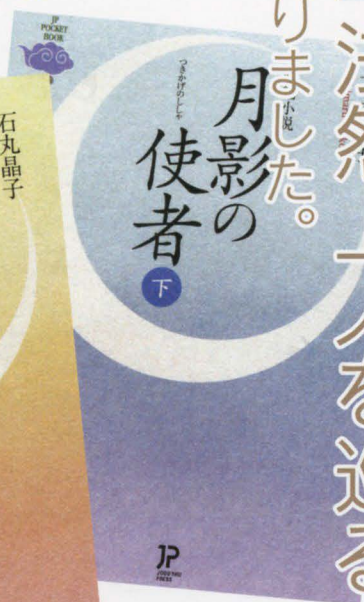
無量寿經に「此に於いて善を修すること十
日十夜ならば、他方諸仏国土に於いて善をな
すこと千歳ならんに勝る」云々の文によって
行う別時会の行事ですが、現在は一日で行う
寺院が多いです。

元々は農耕文化の名残で、旧暦の十月に民
間習俗として行われていた亥の子・十日夜と
呼ばれた稲の収穫感謝祭です。亥の子は主に
関西から西、十日夜は関東以北で呼ばれた名
称です。両方とも刈り上げ祭で、各家庭で餅
をつくことと、地面を打って回ることなどが
共通しています。十夜法要に仏前にお供えす
る「十夜餅」は、その名残と言えそうです。

月が最もきれいに見えるこの時期、よく月
を阿弥陀仏に譬えたことから、月光の元で、
自然の収穫をご先祖と、阿弥陀仏に感謝して
念仏会を営んだのです。

十夜寺空より雀降り来たり 岸田稚魚

ほとけの
慈悲は
いつの世にも
誰のもとにも



石丸晶子先生の
本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち”に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

【問合せ・お求め】 浄土宗出版

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL: 03-3436-3700 FAX: 03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>